

広い背中

伸びた背筋

古い記憶は悩ましく

S

その日の暖かさは愉快といつても過言ではなかった。旧灼熱地獄たるその竈は常に亡者を焼くほどの温度だが、それでも暖かいという感想を抱くのは、地上に出ていくことが多くなつた昨今のためだろう、と寝返りで目を覚ましたお燐はあくび混じりに考え、いや、それは自分の勘違いじゃないかしらん、実際問題、今日は暑すぎるぞ、とあくびのままで舌を出した。

お空のせいにしない。首元をゆるめて、お燐は今や熱源そのものときえ言える友鳥のもとへ鼻先を向けた。地霊殿の寢床を抜けだし、旧都から旧地獄に潜り込めば、もはや沸騰しているとしか思えない大気がやってくる。暑い暑いと舌を出して文句を言つても、聞くべき鳥はまだ見えない。いつもにまして歪む蜃気楼は見たこともない獣のようだ。それにしても、暑い。暑すぎやしまいか？

「いや何コレ」

既視感は一瞬だった。巫女と魔法使いが陽炎を軽や

かに避ける姿が歪む視界の先に見えたような気がして、しかし、それは過去の熾り火として消えていく。お燐は一声鳴いて服を脱ぐと、火車を押して熱の下、エネルギーの位相、地獄の住民だけが住まう帯域を進んだ。暑さはもう感じない。いいや、実際のところ大変暑いことこの上ないが、それよりも灼熱の奥に輝く鳥のことが気になった。

太陽は地の底に、いま、頭れている。深奥にして中樞の火、古き陽光はその無造尽な火力を身のうちに起こし、漏れる熱量は地獄をなにものもたどりつけない聖域にさせている。そうして一日ぶりにあつた鳥は、変わらぬ様子で眠っていた。

「やお燐！」

だからこのように親しげに声をかけてくる鳥は、自分の知っているお空などではない。いくら阿呆に羽が生えているとは言え、眠っているのを忘れてやあ今日は蠱惑的だねなど言つて来るものかとお燐は猫背になり、鼻提灯を膨らませて白目を剥いている鳥が友達だと言つていた過去を後悔した。

S

「お空を起こさねばなりません」

サラシに腰布、捻り鉢巻に右手は団扇、かつかしな
がら牙を剥き出して地霊殿に乗り込んできた鬼の勇戯
に対してサトリは全てを無視して言い放ち、

「閻魔を呼びます」

「この暑さはなんだ！　なんだ?!　なんだってえ!」

「服、着て下さい」

「質問に答えろ！」

「はい、貴方は馬鹿です」

「そうか。ヌウ」

このやり取りだけで、さとりと勇儀の大まかな意志
疎通は完了した。

地霊殿の、陰鬱とした薄暗い広間は今現在蒸し風呂
もかくやの状態になっている。はたしてそれは地霊殿
の存在する地下世界そのものにまで及び、しかしなが
ら主であるさとりは大した問題ではないという顔で椅子
に腰掛けたままだった。

「八咫鳥が調子にのことは、あるともないとも言
切れません。現実におきかたからそういうことも
あるだろう、という程度の認識でしかなかった」

「あ？　なんのことだ」

「あなたの疑問です。言ってみてください」

「なぜ閻魔なんぞよばにやならん」

鬼の勇儀はどつかと床に胡坐をかいて、背を伸ばし、

頭をあげ、さとりの目を見据えた。おなじようにさと
りは顔を俯かせて正面から鬼の目を覗き込む。そうい
う動作、心を読む妖怪を恐れる事もせずにどうどうと
正面から対峙できるのは地下世界でも鬼ぐらいのもの
で、それがあるから勇儀は旧都の頭のような立場にい
るのだらうとさとりは考えていた。実際のところ、彼
女の心を読む意義は薄い。思考の段階で物事を判断し
ていないからで、そうはいっても長い付き合いの上か
らか、考えそうな事は想像できる。古明地さとりが相
手の考えを想像するという行為は、彼女から学んだと
いつていい。

「火は陽の落とし子である」

ふうと地霊殿の主、古明地さとりは額の汗をぬぐい、
足もとを突っ込んでいる冷水の桶がぬるくなってきた
なと思いつながら、

「あの炎は神です。神であるものを揺るがせられるの
は、人か、神しかない。『さとり』である私や、
『鬼』であるあなたには何も出来ない。それが、世の
理、我々がこの地に住まう理由の一つ」

「腹が減ったな」

「そうですか。しかし閻魔は違う。裁けないものは何
も無い。裁くことしかできない、と言い換えてもいい。
あらゆる法則を無視した、上位的存在からの強制力で